

【10】

鳴海の台地…「宿」を追って

1 鳴海の遊女

京と鎌倉を結ぶ鎌倉街道には、宿(しゆく)と呼ばれる、後の宿場の原型ができました。鎌倉時代末の『実暁記』ではその数63宿とされ、この付近では、萱津、熱田に続いて鳴海、沓掛、とあります。

この鳴海の宿には、平安時代に早くも遊女の話が残ります。一つは尾張国司藤原元命の話です。『地蔵菩薩靈驗記』では、鳴海の女のもとに通っていた元命が、ある日地蔵菩薩の彫ってある卒塔婆を橋の代わりにして沢を渡ったというものです(図1)。地獄に落ちて地蔵に救われたことからでしょうか、この沢は

地蔵沢とか地獄沢と呼ばれます。沢は今の新海池の下にあたるといいます。

もう一つは『平家物語』にあるという話です。尾張の井戸田に流された西光法師の息子、藤原師高の最後のところでは、「骨をば師高が思いける鳴海の遊女の手から取り納めけるとぞ無慚なり…」とあります(文献④)。これらの真偽は別にしても、中世以前から鳴海の遊女が存在が知られ、ひいては宿の存在をも暗示しているように思えます。

前回までで鳴海淵を渡った、上・中・下の3本のルートは、今回は、野並→古鳴海→嫁ヶ茶屋…と一本になって街道跡を追い、この鳴海の宿の跡をさがすこととなります。

2 中世の鳴海

(1) 鳴海の宿

鳴海は、10世紀の『和名抄』にも成海郷とある古い地名です。範囲も動いていますが、少なくとも今の古鳴海から鳴海の一帯は昔から鳴海と呼ばれた所でした(図2)。

この鳴海は中世には宿のあったことは間違いなさそうですが、具体的にどこにあったかとなると諸説があって分かりません。



図1 地獄沢の故事「小治田真清水」

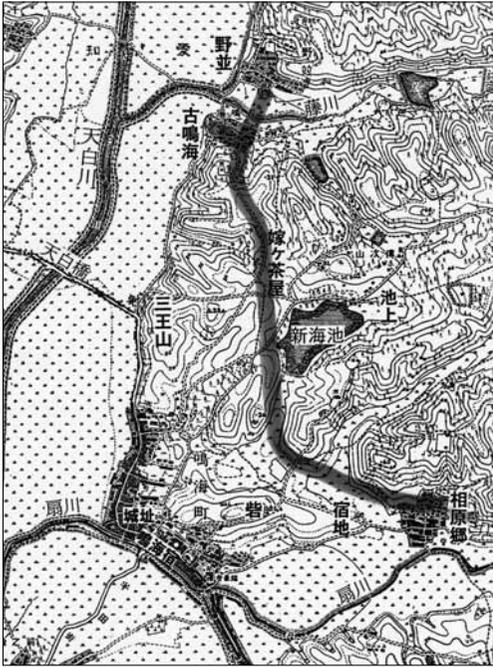


図2 古鳴海から相原郷に(明治中頃)

その候補の1つ目は、今の「古鳴海」ではないかとするものです。鳴海潟の船着場があり、今の鳴海に移る前の鳴海荘の本所だったとするものです。2つ目は、古鳴海を南に上がった「台地上」にあったとするものです。元々この鳴海の最初の集落は、やや南の新海池付近

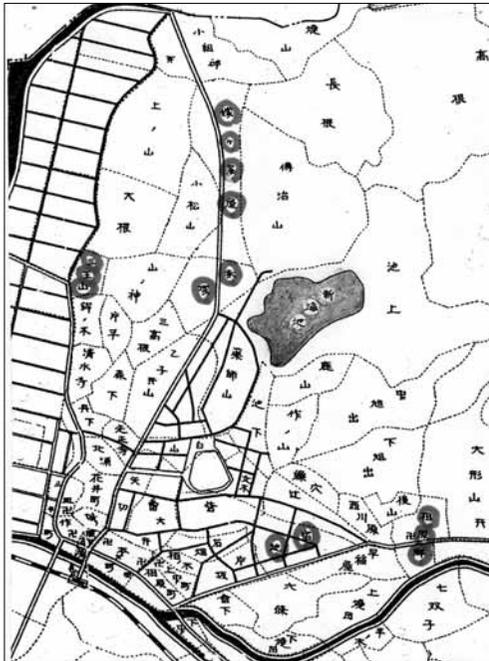


図3 鳴海町時代の「字」(文献③)

の台地だといわれています。この説では地名に残る嫁ヶ茶屋もこの宿の一部と見ることができそうです。3つ目は、さらに南に台地を下った扇川沿いの「相原郷」ではないかとするものです。すぐ西に宿地(しくじ)という宿を想像させる字があることが大きな理由とされます(図3)。

(2) 鳴海城

街道と並んで、中世の鳴海にはもうひとつ拠点ができました。室町時代に入った1394年、鎌倉街道の西南の海沿いに鳴海城が築城されたことです。場所は江戸時代の宿場のすぐ裏ですが、当時は、西には鳴海潟の深田、南は扇川(黒末川)、北と東には鳴海丘陵に囲まれた要害の地でした。ここが150年程後に桶狭間の戦いの舞台になったのです。

(3) 街道と宿の大移動

鳴海は、中世末に鎌倉街道筋から後の東海道筋に集落の大移動があったことが知られています。東海道制定の数十年前から、たとえば字で言うと、赤塚から丹下に、宿地から相原に、上ノ山・三王山からも丹下になどへと移転がありました。寺も同じですが、少し早くから、小松山からは如意寺が、砦からは浄泉寺が、薬師山からは長翁寺が、などと多くの寺も新道沿いに集まることになりました。山越えの旧道に変わって凹凸の少ない新道が開発され、利用され始めたということでしょう。そしてその新道は1601年東海道に指定され、鎌倉街道は廃道になっていったのです。

(4) 鎌倉街道のルート

鳴海潟を渡った上ノ道の終点の野並から南に藤川を渡るとすぐ古鳴海です。ここで中ノ道と合流し、東南に台地を上ります。さらに南に進んで嫁ヶ茶屋の峠に出、ここで下ノ道と合流します。この先の相原までは、新海池の西側説と東側説があります。池は江戸時代にできましたから、中世は谷間でした。

東側説は池の東に茶屋ヶ根という所(池上付近)があってそこを通ったということのようです。ところが地形から見ると、谷に下ればまた上るか遠回りをしなければなりません。西側説は峠から南にゆるやかに下り、池の下

の谷間を渡ります。そして作の山の麓を横切って東に向きを変え相原に向かうもので、この方が自然なルートのように思えます。

3 鎌倉街道をさがす

それでは野並から街道跡を追ってみましょう。地下鉄野並駅の2番出口を出ると右に曲がりこむような細い道があり、東に緩やかに上っています。この道は鎌倉街道跡と案内されています(行き先は?)。少し行くと八剱社があります。野並が熱田社の大宮司千秋家の領地だった関係のようです。神社の南側の階段を下ると幹線道路です。この前方に街道の松ではないかという「並松」がありました。今は住宅街に消えました。



野並八剱社と鎌倉街道とされる道

野並の交差点にでて南に進み、藤川を渡るとすぐ古鳴海です。川の東南の斜面が中世の鳴海だったのでしょうか。ここが宿の1つ目の候補地です。南の台地上る道はいくつかありますが、まっすぐに上る車道は新道で、左手の細い道は戦前からの旧道です。明治の地図にあるのは新道を少し行った所で交差している細い、いわば旧々道になります。

その道に入る前に、新道を100^{メートル}程行った桂林寺に寄ってみます。この寺は古くは薬師堂といい平安時代の創建です。寺の左奥の墓地の入口に、昔鎌倉街道沿いにあったというお地蔵さまがあります。寺を出て坂を戻り、一本目に交差する細い道(旧々道)を東に入ります。道は集落の中を進み、いったん旧道に出ます。その左に石仏の祠があり、遠く八剱社の森が見通せます。想像を豊かにすれば、ここから北に行く道が野並への道であり、ここは上ノ道と中ノ道の合流点だったかもしれません。すぐ旧道を離れ、右に坂を上ります。突き当りを左に行き、上りきるとすぐ落ち着



古鳴海の交差点。正面遠方の森は八幡社いた街道らしい道になります。

新道を横切ると八幡社です。室町時代創建という古鳴海地区の神明社でしたが、明治時代の統合で格が上の八幡社の名になりました。南に出て社に沿って新道に戻ります。新、旧、旧々と別れていた道は一本になりました。この付近が宿の2つ目の候補地です。

ここから先が字嫁ヶ茶屋です。街道のルートは分かりませんが、台地の尾根をたどるとするとほぼ現在の車道になります。少し行くと伝治山交差点で、西(笠寺)からの下ノ道と合流します。昔は小松山の小さな峠になっており、鳴海湯の潮の具合も見えたでしょう。茶屋にはいい場所だったかもしれません。

ここから南は赤塚といい、西の三王山にか



古道らしい旧々道



古鳴海の八幡社。昔は神明社だった



嫁ヶ茶屋付近。右手の小山が小松山？

けては織田信長が桶狭間の前哨戦で鳴海城の山口氏と戦った所です。次の信号を左に入った所に、石室の露出した赤塚古墳があります。またその次の角を北に入ったところには、塚の残った大塚古墳があり、この付近の豊かな歴史を物語っています。東側には所々から新海池が見えます。南に下り、池の締切口に出ます。1634年、池は新海五平治によって造られました。堤の中央から南に行く道は川の跡ですが、埋め立てられ、もちろん昔の地蔵沢とか地獄沢のイメージはありません。

東南に進む街道を追ってジグザグに進み、東に見える高台の作の山の南に出ます。そして5差路の所で東に行く道を選びます。街道は昔の字の境を通っていたようで、今の道路とはわずかに角度がズレています。バス通りを越え、旭出川の水路で1本南の道に移ると



江戸時代にできた新海池。中世は谷間だった



新海池の下の水路の跡。元命が渡った地獄沢はこの付近？

潮見が丘公園です。東に進むと左手に墓地があります。整理されていて入口に一列に石仏が並べられています。この付近も鎌倉街道に間違いのないといわれている所です。次の角に行くと道が少し細くなり、緩い下り坂の向こうに浄蓮寺の屋根が見えます。そこが今回目指した相原郷になります。



正面に相原郷。ここから右に下ると「宿地」がある

街道跡を外れて右に坂を下るとすぐ幹線道路です。その向こう、西南の角から西が宿の3つ目の候補地、相原の「字・宿地」になります。バス停はその交差点の西にあります。

4 みなと街？ 相原の宿

相原の宿地には、忘れてはならないことがあります。当時、名古屋の東部山地は陶器の一大産地だったことです。とくに鳴海の東には平安時代から鎌倉時代、多くの窯場がありました。陶器の積み出しには舟運が欠かせません。当時、扇川にはどこまで船が入ったか分かりませんが、宿地の南の扇川の対岸には舟着場の遺構と思われる所が見つかり、無釉の陶器も出土したといえます(文献①)。宿地の付近は陶器の積み出し基地だった可能性があるので。

鎌倉街道は今日でいえば高速道路でしょう。相原付近は主要産物の輸入基地の港湾でした。そう考えればその交点には街が形成されても不思議ではありません。鳴海はみなと街。遊女がいたことも理解できそうな気がします。

その後、陶器は産地の移動で少なくなり、積み出しも下流に移りました。そして街も下流へと動いて行ったのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①吉田富夫「名古屋の古道とその開拓」(1971、『文化財叢書』)所収
- ②榊原邦彦「熱田鳴海の鎌倉街道」(1973、『熱田風土記?』)所収
- ③榊原邦彦「緑区の史跡」(2000、鳴海土風会)
- ④大野一英「名古屋の駅の物語(上)」(1980、中日新聞社)